

徳島大学教養部紀要

(人文・社会科学)

第二十三巻 別刷

1988

「ニーベルンゲンの歌」における悲劇の二重構造

——ジーフリトとリュエデゲールの役割——

石 川 栄 作

## 「ニーベルンゲンの歌」における悲劇の二重構造

——ジーフリトとリュエデゲールの役割——

石 川 栄 作

Zur Doppelstruktur der Tragik im Nibelundenlied

——Die Rollen Sifrits und Ruedegêrs——

Eisaku ISHIKAWA

### Zusammenfassung

Die Doppelstruktur der Heirat und der Einladung findet sich im ganzen Nibelungenlied: nach der Doppelheirat geschieht Prünhiltis Einladung im ersten Teil, wie nach Etzels Heirat Kriemhiltis Einladung im zweiten Teil. In der symmetrischen Struktur spielen Sifrit und Ruedegêr besonders wichtige Rollen. Gemeinsam ist den beiden, daß jeder zuerst als Helfer bei der Werbung des Königs, und dann als Gast oder Führer bei der Einladung der Königin auftritt. Ihre Rollen stehen aber in schroffem Gegensatz zueinander. Hier sollen ihre Gestaltungen und ihre Rollen verglichen werden, um die Struktur der Nibelungentragedie deutlich zu machen.

Sifrit ist im wesentlichen ein alt-germanischer Held, der einmal vor einem Berg mit den Nibelungen gekämpft und den Hort geraubt hat, und dessen Haut seit dem Baden im Blut des Drachen von Horn überzogen ist. Solch alt-germanischer Sifrit, der noch weiter sowohl die starke Prünhilt als auch die Wege nach Island kennt, ist unentbehrlich als Helfer bei der Werbung des Burgondenkönigs Gunther. Er macht sich aber dabei im Vertrag mit Gunther zu dessen scheinbarem Gefolgsmann, um die hohe Minne der schönen Kriemhilt zu erstreben. Er ist nun ein alt-germanischer Held und zugleich auch ein höfischer Ritter. Mit der Hilfe dieses doppelten Sifrits verwirklicht sich die Doppelheirat im ersten Teil. Die Heirat Prünhiltis, durch Sifrits übermenschliche Kraft gezwungen, bedeutet aber die Beleidigung, die später im Zank der Königinnen aufgedeckt wird. Dieses *leit* Prünhiltis, das Sifrit bei der Einladung nicht erkennt, verursacht schließlich Sifrits Mord. Der eigentlich alt-germanische Sifrit ist aber beim Meuchelmord durch Hagenes List als ein höfisch-ritterlicher Mann geschildert. In Sifrits Tod verschmelzen also das alt-germanische und das höfisch-ritterliche Element. Gerade in der Verritterung des alt-germanischen Helden besteht die Eigenschaft der Tragödie Sifrits.

Zum Unterschied von Sifrit tritt Ruedegêr ganz und gar als ein höfischer Ritter auf, der mit Treue dem König Etzel dient. Solch höfisch-ritterlicher Ruedegêr, der noch dazu von Kindheit an die edle Kriemhilt kennt, ist unbedingt nötig als Helfer bei der Werbung des Hunnenkönigs Etzel. Gerade um seiner höfischen Ritterlichkeit willen verweigert Kriemhilt nicht, ihn zu sehen. Mit dem von ihm treulich geschworenen Eid entschließt sich Kriemhilt außerdem, den König Etzel zu heiraten. Im Gegensatz zu Prünhiltis Fall bedeutet die Heirat Kriemhiltis die Vermehrung der Macht, die aber später den Burgondenuntergang verursacht. Das *leit* Kriemhiltis, das sich in ihrem Herzen verbirgt, erkennt Ruedegêr leider nicht. Ahnungslos dient er nur treulich den Burgonden auf der Reise der Einladung. Wegen seiner gastfreundlichen Aufnahme gerät er in den tragischen Konflikt ohne Ausweg. Das Heroische tritt aber bei Ruedegêr in dem Augenblick hervor, als er sich entschließt, *sêle unde êre* (2166, 1) zu wagen. Nunmehr handelt er nicht als höfischer Ritter, sondern als germanischer Held. In der Heroisierung des höfischen Ritters besteht die Eigenschaft der Tragödie Ruedegêrs. Sein Tod ist aber

auch doch höfisch gefärbt dadurch, daß er noch im letzten Augenblick seines Lebens durch die Übergabe seines Schilds seine höfisch-ritterliche *tugent* (2199, 4) beweist. Seine edle Tugend wirft ein helles Licht in die Handlung, die umgekehrt immer dunkler und finstrier wird.

Der Unterschied zwischen den Rollen Sifrits und Rüdegêrs ist nun ganz klar: Sifrit bringt vor allem die alt-germanischen Züge in dieses Werk, während Rüdegêr die höfisch-ritterlichen Elemente verstärkt. Mit der Verschmelzung der beiden Elemente, die überall im ganzen Nibelungenlied zu finden ist, entwickeln sich Prünhiltis Rache im ertsen Teil und Kriemhiltis Rache im zweiten Teil. Durch diese Doppelstruktur der Tragik wird die Nibelungentragödie noch eindrucksvoller verstärkt.

## 序

「ニーベルンゲンの歌」は、全体の構成を眺めてみると、前編と後編とがともに結婚と招待という出来事から成り立ち、しかもそれらはいずれも十数間という時間によって隔てられていることがわかる<sup>1)</sup>。前編では、すなわち、ジーフリトとグンテル王の二組の結婚が成立して10年後 (vgl. 715, 2)、グンテル王の妃プリュンヒルトがジーフリト夫妻を饗宴へと招待し、後編でもまたエツェル王の結婚式後13年目 (vgl. 1390, 4) にして、国王の妃クリエムヒルトがブルゴント族を饗宴へ招待することとなるからである。北はニーベルンゲンの国及びイースラントから南はフン族の国に至るまできわめて広範囲な空間が物語の舞台となっている。「ニーベルンゲンの歌」において、あらゆる人物は前編では二度にわたってライン河畔のウォルムスに集結し、後編では同じく二度にわたってドーナウ河畔のエツェルンブルクへと集合するのである。ウォルムスとエツェルンブルクとを拠点とした結婚の旅と招待の旅を軸にして、前編と後編とが均整のとれた二重構造を有していることが明らかである。全体を図式化するとすれば、巻末の図式Ⅰのようによまとめることができるであろう。このような整然とした構成の中であって、結婚と招待のいずれの旅にも関与していて重要な役割を演じているのが、前編ではニーデルラントの英雄ジーフリトであり、後編ではベッヒェラーレンの辺境伯リュエデゲールである。両者はいずれものちの悲劇の契機となる両国王の求婚の旅において援助者として尽力しているばかりではなく、招待の旅では招待された者 (ジーフリト) あるいは案内者 (リュエデゲール) としてその饗宴の地へと赴いているのである。副次的な人物として理解されがちなこのジーフリトとリュエデゲールは、それぞれ前編と後編において、無くてはならない人物であることが容易に理解できよう。しかもこの二人は、よく考察してみると、前編と後編で著しい対応関係を示しているのである。ジーフリト像については「エッダ」や「サガ」に見られるような古代的な性格がこの作品にも伝承されているのに対して、リュエデゲールの人物形象には13世紀初頭の詩人による創作部分が多い<sup>2)</sup>とされているのであるが、このような二人の人物形象並びにその役割を理解することは、「ニーベルンゲンの歌」を解く重要な鍵であると言っても過言ではないであろう。そこで本稿では、結婚

1) 前編と後編との間もまた13年間 (vgl. 1142, 1) という時間で隔てられている。原文では勿論前編と後編の区別はつけられていないが、一般の慣例に従ってここでも両編に分けて考えることにしたい。

2) 相良守峯：ドイツ中世叙事詩研究 (富士出版株式会社1948年、郁文堂1960年) 243頁。

と招待という二つの出来事の二重構造を軸として、その中におけるジーフリトとリュエデゲールの人物形象及びその役割を考察することによって、「ニーベルンゲンの歌」前編・後編の特質、すなわち、ニーベルンゲン悲劇の構造の特質を探ってみることにしたい。

### 1. 両国王の求婚——グンテル王とエツェル王——

「ニーベルンゲンの歌」本来のあらすじは、ジーフリトの求婚とグンテル王の求婚によって大きく動き始めるが、全体の構成を考えた場合は、グンテル王の求婚とエツェル王の求婚とが前編と後編で均整のとれた二重構造を成していると考えられる（巻末図式Ⅰ参照）であろう。両国王の求婚はそれぞれのちの両王妃の leit の復讐——これも二重構造を成している——への契機となるからである。この両国王の求婚は、単に男性として美しい乙女の愛を求めるジーフリトの場合とは異なって、いずれも国王として王妃を求めている点<sup>3)</sup>で共通しているが、求婚の動機には明らかな相違が認められる。グンテル王は、海のかなたに美しい乙女がいるという噂を伝え聞いて (328)、ウォルムスからイースラントへと旅立つ決心をするのに対して、エツェル王は、逆に受動的に身内の人々から再婚の話として、ブルゴントの国にいる誇り高い寡婦クリエムヒルトを勧められるからである。自発的なグンテル王の求婚が一種の「冒険」(Abenteuer) の形式をとっているとすれば、他動的なエツェル王のそれは「純粋な国家行為」(ein reiner Staatsakt) である<sup>4)</sup>と言えよう。グンテル王の求婚が冒険的なものであれば、グンテル王のそれに対する決意も、それにふさわしく堅固なものである。

Dô sprach der vogt von Rîne:      《ich wil nider an den sê  
hin ze Prûnhilde,      swie ez mir ergê.  
ich wil durch ir minne      wâgen mînen lip:  
den wil ich verliesen,      sine werde mîn wîp.》 (329)

さてラインの国王がいった、「どんな結果になろうと、  
わしは海の方へ下って行って、プリュンヒルトを訪ねよう。  
あの女の愛を得るためには、身命をも賭するつもりだ。  
もしあれを妻となしえないくらいなら、わしは生きてはいない。」

この向こう見ずな決意に対して客人のジーフリトは、グンテル王にその求婚の旅を思いとまらせようと忠告する (330)。なぜなら、プリュンヒルトは、勇壮なる武人を相手とし、愛<sup>ミンネ</sup>を賭けて三種の競技を行ない、その一種目たりと敗れば、その武人は首を失うことになる (326-7) という実に恐ろしい習慣 (330, 2) をつづけていたからである。古代ゲルマン的な冒険を必要とす

3) ジーフリトの求婚を自然的求婚であるとすれば、両国王の求婚は社会的求婚であると考えられることもできよう。

4) Vgl. Helmut de BOOR (Hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage F. A. Brockhaus Wiesbaden 1972. Erläuterung S. 14.

る危険な求婚の旅であると言えるが、しかし、グンテル王の決心は変わらない。積極的なこの前編のグンテル王に対して、後編のエツェル王は消極的であり、控え目である。

Dô sprach der künic rîche:      《wie möhte daz ergân,  
sît ich bin ein heiden      unt des toufes niht enhân?  
sô ist diu vrouwe kristen:      dâ von sô lobt sis niht.  
ez müese sîn ein wunder,      ob ez immer geschiht.》 (1145)

勢威ある王がいった、「どうしてそんなことができよう。  
わしは異教徒であって、洗礼をうけたことはない。  
むこうはキリスト教徒だから、とても承諾するはずがないのだ。  
もしそんなことができたなら、奇跡というしかあるまい。」

グンテル王の場合は身のまわりの者たちから反対されたのに対して、エツェル王の場合は逆に説得される (1146) ほどなのである。このように求婚の動機は全く対照的であるが、しかし、両者の求婚はともにそれぞれの意味において困難なもの (vgl. 331; 1145) であることには変わりがない。そこでグンテル王の求婚に援助を施すことになるのが、ニーデルラントの英雄ジーフリトであり、一方エツェル王の求婚に重要な役割を演じているのが、ベッヒェラーレンの辺境伯リュエデゲールなのである。ジーフリトとリュエデゲールは、このように国王の求婚の援助者という点で、前編と後編で対応関係にあると言えるわけであるが、両者はこの作品では詳細に至るまで全く対照的であると言わなければならない。

まずジーフリトは本来冒険を求めて旅をする英雄であり、とある山の麓ではニーベルンゲン族と戦い、その財宝を奪い取り、宝の所有者となった (87-99) という古代ゲルマンの英雄である。またジーフリトは、ある日竜を退治したとき、その血を全身に浴びて、そのため肌が不死身の甲羅と化し、どんな武器も彼を傷つけ得ない英雄ともなった (100) というのである。これに対してリュエデゲールは、のちに登場するエッケワルトの言葉を用いて表現すれば、「さながら五月が草木の花を育てるがごとく、胸のうちに徳性を育む」(1639) 宮廷的騎士であり、贈与を一つの美德と考えた典型的な中世騎士である。ジーフリトが本質的に古代ゲルマンの英雄にふさわしく「冒険をする者」・「獲得する者」であるとするなら、リュエデゲールは宮廷的騎士にふさわしく「忠実に仕える者」・「与える者」であると言えよう。ともかく古代ゲルマンの伝説が漂っているジーフリトの場合に対して、リュエデゲールの場合は全く宮廷的な雰囲気がある漂っていると言えるのである。

このような二人の本質的な相違は、国王の求婚に際して援助の依頼を受けた場面からも明らかである。ここで両編の依頼の場面を対比してみよう。まずグンテル王は、ハゲネの忠告 (331) に従って、プレンヒルトのことはよく心得ている (331, 4) という客人のジーフリトに向かって援助を依頼する。

Er sprach: «wil du mir helfen. edel Sîvrit,  
werben die minneclîchen? tuostu, des ich dich bit,  
und wirt mir z'eime trûte daz minneclîche wîp,  
ich wil durch dînen willen wâgen êre unde lîp.» (332)

そこで王がいった、「ジーフリト殿、いとしい女への求婚に、力を貸してはいただけまいか。もしおん身がこの願いを容れ、あのいとしい女がわしの妻となるようなら、わしはおん身のために名誉をも身命をも惜しまない所存です。」

これに対して、ジゲメントの王子ジーフリトは、危険を伴う援助の報酬として次のような要求をする。

«gîstu mir dîne swester, sô wil ich ez tuon,  
die scœnen Kriemhilde, ein kûneginne hêr.  
sô ger ich deheines lônnes nâch mînen arbeiten mêr.» (333, 2-4)

「もし妹君を、あの貴い王女なる美しいクリエムヒルトを、私にお与え下さるなら、<sup>よろこ</sup>喜んでお力添えをいたしましょう。それ以外には私の骨折りに対し、何らの恩賞も望みません。」

この要求に対してグンテル王は、美しいプリュンヒルトがこの国へ来た暁には妹を妻としてさし上げようと、ジーフリトの手を握って約束する (334)。二人は誓いをかため (335, 1)、ここに一つの契約が成立するのであるが、この場面におけるジーフリト像は「エッダ」や「サガ」に伝承されているような古代的な人物形象を前提としている。すなわち、ジーフリトはプリュンヒルトと面識のある (331, 4) 古代ゲルマンの英雄なのであり、そのことを知っていたハゲネがグンテル王に進言して、グンテル王から援助の依頼を受けることとなったのである。国王の求婚が古代ゲルマンの国への冒険的な旅であれば、援助者もまた古代ゲルマンの勇士でなければならないのである。

しかし、本来古代ゲルマンの勇士であるジーフリトはグンテル王との契約によって、リュエデゲールと同じように、国王に仕える中世の宮廷的騎士に変身したと言わなければならない。古代ゲルマンの英雄ジーフリトは今や、気高きクリエムヒルトのミンネを求めて「仕える」(vgl. 388) 中世の騎士なのであり、この契約は必然的に、ジーフリトはグンテル王の家来であり、グンテル王はジーフリトの主君であるという主従関係へと発展する。イーゼンシュタインの城を目の前にしたとき、ジーフリトはそのことを一行の者たちに明らかにしているのである。

«Unt wil iu helden râten, ir habt einen muot.  
ir jehet gelîche, jâ dunket ez mich guot.  
swenne wir noch hiute für Prûnhilde gân,  
sô müezen wir mit sorgen vor der kûneginne stân. (385)

Sô wir die minneclîchen      bî ir gesinde sehen,  
 sô sult ir, helde mære,      wan einer rede jehen:  
 Gunther sî mîn herre,      und ich sî sîn man.  
 des er dâ hât gedingen,      daz wirt allez getân.》 (386)

「ついでには勇士の方々にお勧めいたしておきますが、  
 皆が調子を合わせ、同じような言い草をするのがよいかと存じます。  
 今日にもプリュンヒルトに直面するときは、  
 我々は用心してあの女王の前に立たなければなりません。

すなわち、あの美しい女王が家臣とともにいるところに出たら、  
 高名な各位には、言うことを一つにさせていただきたい。  
 つまり、グンテル王は私の主君であり、私は家来であると。  
 そうすれば王の希望なさることが実現いたしましょう。」

ジーフリトは、従って、グンテル王の求婚の旅にあたって二重の像で行動しなければならないのである。すなわち、表面上はグンテル王に仕える中世騎士として、また肝心な「力」を必要とするところでは古代ゲルマンの英雄として行動しなければならないのである。

このようにジーフリト像の中には二重の像が認められるのであるが、後編のエッツェル王の依頼の場合はどうであろうか。求婚に控え目なエッツェル王は、幼少の折からクリエムヒルトのことはよく知っている (1147, 4) というベッヒュラーレンの辺境伯リュエデゲールに、使者としての手助けを依頼する。

Er sprach: 《sô wirb ez, Rüedegêr,      als lieb als ich dir sî.  
 und sol ich Kriemhilde      immer geligen bî,  
 des wil ich dir lônên,      so ich aller beste kan.  
 sô hâstu mînen willen      sô rehte verre getân. (1151)

Ûzer mîner kameren      sô heiz' ich dir geben,  
 daz du unt dîne gesellen      muget vroeliche leben,  
 von rossen und von kleidern      allez daz ðu wil.  
 des heize ich iu bereiten      zuo der botscheffe vil.》 (1152)

王がいった、「ではリュエデゲールよ、何とかひと肌  
 ぬいではもらえまいか。クリエムヒルトと契ることができたら、  
 能うかぎりの恩賞をとらせるつもりだ。そうなればおん身は  
 わしの願いをいみじくも果たしてくれたことになるから。

わしは掛かりの者に言いつけて、おん身と供のものが  
 愉快に旅のできるよう、わしの宝庫から乗馬でも衣裳でも、  
 おん身の欲するだけのものをなんでも取らせよう。  
 使命を果たすために、十分な準備をととのえさせるつもりだ。」

求婚に際しての援助の依頼という点で、前編との対応は明らかである。しかし、後編において国王に答えるリュエデゲールの返事はジーフリトとは全く異質のものである。

《gerte ich dînes guotes,      daz wære unlobelîch.  
ich wil dîn bote gerne      wesen an den Rîn  
mit mîn selbes guote,      daz ich hân von der hende dîn.》 (1153, 2-4)

「あなた様の財宝をいただくなどは、ほめた話ではございません。  
お使いの儀は、私がこれまで<sup>おもひ</sup>いただいている  
自分の私財をもって、ラインへ赴きたいと存じます。」

恩賞も旅支度のための財宝も要らないというこのリュエデゲールの控え目な態度は、使命を果たした暁には国王の妹を妻にもraitたいと望むジーフリトと対照的である。「忠実に仕える者」としてのリュエデゲールの宮廷的徳目がこの場面できわめて簡潔に表現されているのである。ともかく、この依頼の場面と言えることは、ジーフリトは、恐ろしい習慣をつづけている (330, 2) プリュンヒルトのことをよく心得ている (331, 4) 古代ゲルマンの英雄なのであり、一方リュエデゲールはウォルムスに住む気高きクリエムヒルトのことを幼少の折から知っている (1147) 宮廷的騎士なのである。

このように国王・援助者がともに冒険的・野心的である前編においては、秘策に満ちた、契約上の主従関係が成立し、古代ゲルマン的な要素と中世騎士的な要素との融合が見られるのに対して、国王・援助者がともに控え目な後編においては、誠実な主従関係が支配しており、全く宮廷的であると言えよう。前編ではこの契約上の主従関係によって、また後編ではこの誠実な主従関係によって国王の願いが叶えられ、結婚が実現するのであるが、それらの主従関係はまたのちにはそれぞれの悲劇の原因ともなっている。

## 2. ジーフリトの援助——隠れ蓑の秘策——

本来古代ゲルマンの勇士であるジーフリトは、こうしてグンテル王との契約によって中世の騎士ともなったのであるが、この古代ゲルマン的な要素と中世騎士的な要素との融合は、イーゼンシュタインへの旅立ちの準備の際にも認められる。十分な威容を保って (mit vollen êren, 339, 2) 船出をするため多勢の軍勢を召集することを提案するグンテル王に向かって、ジーフリトはこの求婚の旅にもっとふさわしい策として少人数で出かけることを提案する。

《Wir suln in recken wise      ze tal varen den Rîn.  
die wil ich dir benennen,      die daz sulen sîn.  
selbe vierde degene      varn wir an den sê.  
so erwerben wir die frouwen,      swie ez uns dar nâch ergê.》 (341)

「私たちは武者修業<sup>い</sup>の体で、ライン河を下ってゆくのです。



一行に加わるべき人数を申しあげれば、私たちを入れて四人だけで、海を渡って参るのです。成行きのはどはいかにもあれ、これであの婦人を手に入れることにしましょう。」

宮廷的な旅立ちではなく、武者修業の体で (in recken wise, 341, 1)、わずか四名で小舟で出かけるのであり、これは全く冒険的であり、古代ゲルマン的である。しかし、この旅立ちの場面でも二つの要素の融合が見られる。グンテル王から衣裳のことを尋ねられると、ジーフリトはこう答えるのである。

《Wāt die aller besten, die ie man bevant,  
die treit man z'allen zīten in Prünhilde lant.  
des sulen wir rīchiu kleider vor der frouwen tragen,  
daz wirs iht haben scande, sō man diu mære hoere sagen.》 (344)

「プリュンヒルトの国では、およそこの世で見出され得る最上の衣服を常住身につけております。それゆえ女王の前では、人の噂にのぼっても恥かしくないような、立派な衣裳を着なければなりませんまい。」

こうして衣裳を準備するさまが長々と細やかに (343-370) 描写されているのであるが、四人乗りの小さな舟と衣裳の豪華さが全く対照的であり、この一行の旅立ちは「武者修業の旅」(in recken wise, 341, 1) であると同時に、「宮廷的な旅」(höfscen rīten, 350, 1) でもあるのである。

ジーフリトはこうして二重の像でイーゼンシュタインへと出かける。航海中は、ジーフリトはそのイースラントへの航路を心得ている (378, 3) 古代ゲルマンの勇士である。ところが、イーゼンシュタインの城に到着したときは、グンテル王の家来でなければならない。ジーフリトはグンテル王が鞍に乗るまで、その毛並美しく、丈高く、たくましい駿馬の手綱を手に支え (397, 1-2)、グンテル王に仕える (397, 3) のである。詩人も語っているように、ジーフリトはおよそこれまで、他の勇士のため鎧のそばに侍るといような奉仕はかつてしたことがなかった (398, 2-3) のであるが、しかし、そのためプリュンヒルトに対面したとき、事がうまく運んだのである。プリュンヒルトから最初に挨拶を受けたジーフリトは、この旅における彼の立場を明らかにする。

《Vil michel iuwer genāde, mīn vrou Prünhilt,  
daz ir mich ruochet grüezen, fürsten tochter milt,  
vor disem edelen recken, der hie vor mir stāt,  
wand'er ist mīn herre: der êren het ich gerne rāt. (420)

Er ist geborn von Rīne, waz sol ich dir sagen mēr?  
durch die dīne liebe sīn wir gevorn her.  
der wil dich gerne minnen, swaz im dā von geschicht.

nu bedenke dichs bezîte:      mîn herre erlâzet dich es niht. (421)

Er ist geheizen Gunther      unt ist ein künic hêr.  
erwurbe er dîne minne,      sone gêt' er nihtes mêr.  
ja gebôt mir her ze varne      der recke wolgetân:  
môht' ich es im geweigert han,      ich het iz gerne verlân.》(422)

「プリュンヒルト姫よ、私の前に立っておられる  
やんごとなきお方に先立って、私にご挨拶を賜りましたことは、  
恵みぶかい姫よ、まことに忝なく存じます。けれども、  
この方は私の主君なので、この光栄はご辞退申したいのです。

わが君はラインの生まれ、と申せば、ほかに何を申しあげよう。  
我々は、おん身の御意を得ようとて参った次第です。  
王は、成行きはいかにもあれ、おん身に愛を求めようのご所存。  
今の中にご思案下さい。王は断念はいたされません。

この方はグンテルと申されて、位たかき国王です。  
おん身の愛をさえ得られれば、それ以上の望みはもたれません。  
この天晴れな勇士が、私に船出するよう命ぜられたのです。  
おことわりできたら、私もやめておきたかったのですが。」

この言葉によって、プリュンヒルトは、自分に求婚しているのはグンテル王であることを知り、ただちに彼との競技の準備をする。しかし、競技は実際にはジーフリトが行なうのである。表面的には中世の騎士としてグンテル王に仕えていたジーフリトも、この困難な危険な競技においては古代ゲルマンの英雄に戻らなければならない。その変身の道具が、かつての冒険の旅でアルプリーヒから奪い取っていたあの隠れ蓑、すなわち、それを身につけると、姿が見えなくなるばかりか、自分自身の力の外に十二人分の力が加わる(336-8)というあの隠れ蓑なのである。この隠れ蓑の秘策によって、ジーフリトは、グンテル王の代わりに競技を行ない、石投げ、幅跳び、槍投げの三種目において、いずれも女王を打ち負かすことに成功する。ジーフリトはこのようにグンテル王の求婚に援助を施すにあたって、二重の人物として、すなわち、表面上は中世の騎士として、また肝心な陰のところでは古代ゲルマンの英雄として、グンテル王に仕えているとすることができるのである。

ジーフリトのこの二重の像は、三種競技の終了後にも認められる。まず、古代ゲルマンの英雄として働くのがニーベルンゲンの国への募兵の旅である。競技終了後、日毎に朝な夕な、続々とプリュンヒルトの一族郎党が城へ詰めかけているのは求婚者たちにとって危機を招く恐れがあったので、ジーフリトは選り抜きの軍兵をひき連れて戻ってくることを約束(479-480)して、古代ゲルマンの英雄として隠れ蓑を身につけて(482, 2)、百マイルかそれ以上もはなれたニーベルンゲン国(484)に出かけるのである。その国でジーフリトは、まず門番である勇猛な巨人と

戦い、その巨人を縛りあげると、次には<sup>どうもう</sup>獐猛な<sup>こびと</sup>侏儒、あの荒武者アルプリーヒと戦い、その<sup>こびと</sup>侏儒をも同様に縛り上げるが、これらの戦いはジーフリトが古代ゲルマンの英雄であることの証明でなければ、一体何であろう。ジーフリトはアルプリーヒに向かって、あらん限りの精鋭の武士を選び、千人のニーベルンゲン人を集めてくれるように要求すると、ほどなくおよそ三千の兵が集まった(505, 1)。その中から最もすぐれたもの一千が選ばれ(505, 2)、その兵を連れてイースラントの国へ戻る。この一千のニーベルンゲン兵と、プリュンヒルトの臣下の中から選ばれた二千の軍兵が、こうして今や女王の供をしてブルゴントの国へ渡ることになるわけであるが、この旅では逆にジーフリトは、ミンネを求める中世の騎士(vgl. 536)として、グンテル王の先触れの使者となって一足先にラインへと首尾よい知らせをもたらすこととなるのである。前編のあらすじの中でもそれほど重要な筋の展開をもたらさないこのニーベルンゲン国への募兵の旅(第8歌章)とウォルムスへの先触れの使者の旅(第9歌章)とは、このようにジーフリトがグンテル王に二重の像で「仕えている」ことのあかし、ジーフリトがグンテル王の家来であるということの実証としても役立っていると言えるのではあるまいか。無用の長物と思われがちのあらすじも、ジーフリトの二重の像の描写に寄与しているのであり、細部に至るまで巧みな構造を有している作品であることがうかがえるのである。

こうしてジーフリトの二重の像によってグンテル王の求婚の旅は首尾よく成功を収め、イースラントの女王は今やグンテル王の花嫁としてラインへと旅立つのであるが、ジーフリトの超人的な力によっていわば「征服」された彼女の結婚は、すなわち、欺かれ、ひどい恥辱を与えられたことを意味していると言えよう。これがのちに暴露されるに及び、重大な悲劇へと発展してゆくこととなるのである。その悲劇の契機は、しかし、ウォルムスでの二組の結婚式の際にすでに見られるのである。すなわち、家来であるはずのジーフリトが国王の妹クリエムヒルトと並んで坐っているのを見て、プリュンヒルトは突然泣き始める。美しくよい躰のクリエムヒルト姫がなぜ家臣であるジーフリトの妻となったのか、それがプリュンヒルトには悲しい(leit, 618, 2; 620, 2)のであり、その理由がわからぬうちは処女のままでいるつもりだ(635)と言って、ついには結婚式の夜のグンテル王の愛撫をも拒んでしまうのである。それどころか、凜々しいプリュンヒルトは、彼女の着衣を掻き乱そうとしているグンテル王を縛り上げ、一晚中一本の釘にかけて壁に吊したのである。プリュンヒルトのleitはこうしてグンテル王のleitをも呼び起こし、再度ジーフリトに援助をあおぐ。またもやジーフリトの隠れ蓑による秘策で、ひとまず事態は表面的には落ち着きを取り戻して、ジーフリト夫妻は故国へと帰ることとなるのであるが、しかし、奥深いところではすでにのちの悲劇の種が決定的にまかれていたのである。全面的にジーフリトの援助を必要とするグンテル王の求婚は、最初から最後まで秘策に満ちていて、前編の悲劇はこうして人の目に見えないところで秘策によって展開されてゆくのである。

## 3. リュエデゲールの奉仕——誠実な誓約——

このように二重の像でグンテル王に仕えている前編のジーフリトに対して、後編のリュエデゲールは徹頭徹尾宮廷的騎士としてエツェル王に仕えていると言える。リュエデゲールが全く宮廷的であるということは、ジーフリトが四名で武者修業の体で (341, 1) イースラントに出かけたのに対して、リュエデゲールは豪華な衣裳を身につけた五百名の派手やかな武士をひきつれて行く (1155) ことから明白である。ジーフリトの旅が本質的には古代ゲルマン的な英雄の旅 (Reckenfahrt) であるとすれば、リュエデゲールのそれは中世騎士の宮廷への旅 (hovereise) であると言えよう。ブルゴントの国ウォルムスに到着して、悩み多きクリエムヒルトが使者との対面を拒むことをしなかったのも、この使者リュエデゲールの宮廷的徳目のゆえであり、そのことを彼女も明らかにしている。

《Daz enwil ich niht versprechen》, sprach daz vil edel wîp,  
 《ich ensehe gerne den Ruedegêres lîp  
 durch sîne manige tugende. wær' er niht her gesant,  
 swerz ander boten wære, dem wær' ich immer unbekant.》 (1221)

「それまで拒もうとは思いません、」高貴な妃が答えた、  
 「リュエデゲールは、あまたの徳を積んだ人ゆえ、  
 よろこんで会いましょう。もしほかの人が使者としてきたのなら、  
 私は決して対面などしようとは思わないけれど。」

こうしてひたすら悲しみの念 (jâmer, 1228, 2) に閉ざされていたクリエムヒルトに対面を許されたリュエデゲールは、彼女の手ひどい心の痛み (starken sêr, 1233, 2) を聞かされると、誠実な気持ちで彼女を慰めてこう言う。

《Waz mac ergetzen leides》, sprach der vil küene man,  
 《wan friuntliche liebe, swer die kan begân,  
 unt der dan einen kiuset der im ze rehte kumt?  
 vor herzenficher leide niht sô groezlichen frumt. (1234)

Und geruochet ir ze minnen den edeln herren mîn,  
 zwelf vil rîcher krône sult ir gewaltec sîn.  
 dar zuo gît iu mîn herre wol drîzec fürsten lant,  
 diu elliu hât betwungen sîn vil ellenthaftiu hant.》 (1235)

「心の痛みをいやすものとは」と、<sup>かんい</sup>敢為なる男子がいった。  
 「優しい愛情のほかにはごさいません。ご自分にふさわしい方を選んで、  
 その愛情を得ることさえできますれば、心の痛手には、  
 これにまさる良薬とてないのでごさいます。」

もしあなたが私の貴い主君と契りをお結びになりましたら、  
十二の豪華な王冠を手にお入れなさいます。なおその上にわが主君は、  
その豪勇をもって征服なされた無慮三十の国々をも、  
あなた様にお贈りなさるのでございます。」

ジーフリトの交渉は三種競技という動的な冒険的交渉であったが、リュエデゲールの場合は全く静的な説得であり、宮廷的交渉である。クリエムヒルトの堅固な決心を和らげ曲げさせたのも、結局のところ、翌朝再度対面した際リュエデゲールが真心から誓った宮廷的な誓言である。彼女の意志の固いことを悟ったリュエデゲールは、ついにいつまでも彼女に仕えることを誓うこととなるのである。

Er sprach zer küneginne:      《lât iuwer weinen sîn.  
ob ir zen Hiunen hêtet      niemen danne mîn.  
getriuwer mîner mâge,      und ouch der mînen man,  
er müeses sêr' engelten,      unt het iu iemen iht getân.》 (1256)

彼は妃にいった、「お嘆きはおやめなさいまし。  
あなたがフン族の国で、よしや私と、私の一族と、  
私の郎党とのほかに一人の家来をお持ちになりませんでも、  
誰かがあなた様に害を加えたら、手痛い仕返しをして差しあげます。」

リュエデゲールのこの言葉にクリエムヒルトの心は軽くなって、そのあかしとしての誓いを要求する。

si sprach: 《sô swert mir eide,      swaz mir iemen getuot,  
daz ir sît der næhste,      der bûeze mîniu leit.》 (1257, 2-3)

「では誓いをたててもらいましょう。誰ぞが私に害を加えたら、  
皆に先んじてまずおん身が私の恨みを晴らして下さると。」

こうして辺境伯リュエデゲールは、すべての家来たちもろとも、いつまでも真心から彼女に仕えること、そしてエツェル王の国の勇士たちも、彼女の名譽を守るためには、決して何事をも辞しはせぬことを固く誓った (1258) ののであるが、このリュエデゲールの誠実な誓いは、前編でグンテル王とジーフリトとの間で交わされた誓い (335)、すなわちジーフリトがブリュンヒルトの前で口にする「グンテル王はジーフリトの主君である」(386, 3; 420, 4) という契約と明らかな対応関係にある<sup>5)</sup> と言ってもよいであろう。ジーフリトの誓約によって前編の悲劇がそののちに展開してゆくように、後編でも同様にこのリュエデゲールの誓約によって悲劇が展開してゆくからである。クリエムヒルトの結婚の決意の中には、すなわち、はっきりと復讐の意図が読み取ら

5) Vgl. Josef SZÖVÉRFY: Das Nibelungenlied. Strukturelle Beobachtungen und Zeitgeschichte. *Wirkendes Wort* 15, 1965. S. 236.

れるのである。

Do gedächte diu getriuwe:      《sît ich vriunde hân  
alsô vil gewonnen,      sô sol ich reden lân  
die liute, swaz si wellen,      ich jâmerhaftez wîp.  
waz ob noch wirt errochen      des mînen lieben mannes lîp?》 (1259)

Si gedächte: 《sît daz Etzel      der recken hât sô vil,  
sol ich den gebieten,      sô tuon ich, swaz ich wil.  
er ist ouch wol sô rîche,      daz ich ze gebene hân.  
mich hât der leidege Hagene      mînes guotes âne getân.》 (1260)

貞節な妃は考えた、「私はみじめな女だけれど、  
こんなにたくさんの味方を手に入れた以上、  
世の中の人にはなんとでも言いたいように言わせておこう。  
いとしい夫の復讐<sup>ふくしゅう</sup>ができさえすれば、そんなことは何であろうか。」

彼女は思った、「エツェル王はあまたの武士を擁しているのだから、  
彼らを支配することができれば何事でも思うようになる。  
また彼は富貴の身ゆえ、私は施すこともできよう。  
私の財宝は憎いハゲネが奪い去ったのだ。」

結婚の決意の瞬間クリエムヒルトは突如として、愛しい夫の死を悼む愛らしい宮廷的貴婦人から、権力欲に満ちた復讐魔へと変身したのである。プリュンヒルトの結婚は彼女の権力の減退を意味していたのに対して、クリエムヒルトの場合は逆に権力の増大を意味している。ジーフリトの超人的な力によって婚礼の旅をいわば「強いられ」て、しとやかな作法を守って、自分の国を立ち出でた(526)プリュンヒルトとは全く対照的に、リュエデゲールの誠実な誓約によって決心させられたクリエムヒルトの旅は、逆に全く古代ゲルマン的である。なるほど、表面的には華やかな結婚の祝宴が繰り広げられるが、クリエムヒルトの心の中では苦しみ(leit)が満ちていたのであり、そのことは次の詩節からも明確である。

Wie si ze Rîne sæze,      si gedâht' ane daz,  
bî ir edelen manne;      ir ougen wurden naz.  
si hetes vaste hæle,      deiz iemen kunde sehen. (1371, 1-3)

ラインにおいて気高い夫とともにくらしただころのことを思い起こして、  
王妃の眼は涙にぬれた。しかし彼女はそれを固く秘していたので、  
だれにも気づかれることはなかった。

プリュンヒルトの涙は他人の目に見られたのに対して、クリエムヒルトの涙は逆に固く秘められており、それだけにクリエムヒルトの復讐の意欲のほどがうかがえると見えよう。婚礼の旅の華やかさとクリエムヒルトの心の中の暗さとが著しく対照的であり、後編のあらすじはこのように

だんだんと雲行きがあやしくなっていくのである。

このようなクリエムヒルトのいわば古代ゲルマン的なものへの旅の中であって、クリエムヒルトの暗い心と著しい対照を成して、明るい光を投げかけているのが、リュエデゲールの誠実な心からの案内と宮廷的なもてなしである。婚礼の旅の途中、リュエデゲールは護衛の役を果たす(1302-3)とともに、自らの領地ベッヒェラーレンでは丁重なもてなしをする(1304-31)のである。ジーフリトと全く対照的な奉仕であることが理解できようが、しかし、両者いずれの援助も、ともに契約あるいは誓いといったものが問題となっていて、それがのちのそれぞれの悲劇の原因となる点では共通しているとも言えるのである。

#### 4. 両王妃の招待——プリュンヒルトとクリエムヒルト——

前編における二組の結婚式及び後編における再婚のあとは、なるほど一見幸せて静かな日々が続いているかのように見えるのであるが、両王妃の心の中では常にただならぬものが吹き荒れていたことは事実であり、その悲劇への兆しは、果たして、いずれの場合にもまず王妃による饗宴への招待という形で表面に出てくるのである。この二つの招待に関しても、前編と後編とで明らかな二重構造を成していると言えよう。

まずプリュンヒルトの場合、招待の本来の動機は何なのか、それについてはテキストにおいて明確に語られている。

Nu gedâht' ouch alle zîte      daz Guntheres wîp:  
 《wie treit et alsô hôhe      vrou Kriemhilt den lîp?  
 nu ist doch unser eigen      Sîfrit ir man:  
 er hât uns nu vil lange      lützel dîenste getân.》 (724)

しかるに、グンテルの妃<sup>きき</sup>は始終こう考えていた、  
 「妃クリエムヒルトがあんなに気位の高いのは、一体どうしたわけであろう。  
 夫のジーフリトは私たちの臣下であるのに、  
 もう久しいこと宮廷に伺候もしていないではないか」と。

この考えを彼女は胸中に抱いたまま、口には出さなかったが、彼らが彼女に疎遠に打過ぎて、ジーフリトの国からいっこう出仕もしないことは、プリュンヒルトにしてみれば面白からぬこと(leit, 725, 2)であったのである。以前のような強い「力」をもはや持ち合わせておらず、地位という表面的なものに固執するプリュンヒルトは、ジーフリトに伺候させたいというのが本来の動機である。国王グンテルにも彼女の心のうちを打明けて話してもみた(726, 3)が、応じてくれないので、ついには虚偽を並べ立ててこう言う。

Si sprach: 《vil lieber herre,      durch den willen mîn  
 sô hilf mir, daz Sîfrit      unt ouch diu swester dîn  
 komen zuo disem lande,      daz wir si hie gesehen.

sone kunde mir zwäre nimmer lieber geschehen. (729)

Diner swester zühte unt ir wol gezogener muot,  
swenne ich dar an gedanke, wie sampfte mir daz tuot,  
wie wir ensamt sâzen, do ich êrste wart dîn wîp!  
si mac mit êren minnen des kûenen Sîfrides lip.》 (730)

妃がいった、「愛<sup>いと</sup>しい王様、私のために、  
ジーフリトとお妹君とがこの国へきて、私たちと対面できますよう、  
お力をかしては下<sup>くだ</sup>さいませんか。そうなれば、  
私にとってこんな嬉<sup>うれ</sup>しいことはございませぬ。

お妹君の淑<sup>しとや</sup>かな物腰、躡<sup>しつ</sup>けのよいお心ばえ、  
それにまた私があなたの妻となりましたころ、あの方と一緒に  
坐ったことなどを思い起こすと、どんなに和<sup>なご</sup>やかな気がするでしょう。  
あの方は勇士ジーフリトの妻として立派な方です。」

以前結婚式の宴の席で一緒に坐ったとき、プリュンヒルトは、和やかな気がしていたどころか、悲しかった (leit, 618, 2; 620, 2) ほどであったことを考えると、このプリュンヒルトの言葉の中には悪意が潜んでいることがわかる。彼女の真意は別のところにあったことを当然のことながらグンテル王は感じ取ることができた筈であるが、彼女があくまでもせがむので、ついに国王は饗宴に招待するという形で使者 (ゲーレ) を遣わす決心をする (vgl. 735; 736)。使者は悪意に満ちたプリュンヒルトの伝言をもってジーフリトの国へ出かけてゆくのである。

一方、後編におけるクリエムヒルトの場合にも、招待の動機はプリュンヒルトと同様、別のところにある。クリエムヒルトはフン族の国で大いなる誉れを担ってはいたが、故郷で我が身に加えられた悩み (leit, 1391, 4) を忘れることはできなかつたのである。彼女がハゲネに復讐の念を抱いていたことは、テキストにおいても明確に読み取られうる。

Si gedâht' ouch maniger êren von Nibelunge lant,  
der si dâ was gewaltic, unt die ir Hagenen hant  
mit Sîfrides tôde hete gar benomen,  
ob im daz noch immer von ir ze leide möhte komen. (1392)

...  
Des willen in ir herzen kom si vil selten abe.  
si gedâhte: 《ich bin sô rîche unt hân sô grôze habe,  
daz ich mînen vînden gefüege noch ein leit.  
des wære et ich von Tronege Hagen gerne bereit.》 (1396)

彼女はかつてニーベルンゲンの国で自分が有しており、  
ジーフリトの死とともにハゲネから奪われた  
あまたの栄華のことを考えるとともに、その恨みを今でもなお



彼に対して報いることができやしないかと考えたのである。

...

復仇の念は彼女の胸から去ることとはなかった。

彼女は思った、「私のこの権勢と、この大きな富とをもってすれば、

憎い人たちに目にも物見せるのに十分だ。

なんとかトロネゲのハゲネに思い知らせてやりたいものだ。」

ハゲネが近くにさえいたら、愛しい夫の仇を報いることができる (1397, 2-3) のだが、それはしかし叶わぬこと (1397, 4) である。そこで彼女は自分の一族をこのフン族の国に呼び寄せることを、優しい気持ちで許してくれるように、国王エツェルに願い出るのである。クリエムヒルトも、プリュンヒルトの場合と同様、虚偽を並べ立ててこう言う。

Dô sprach diu küneginne:      《iu ist daz wol geseit,  
ich hân vil hôher mâge;      dar umbe ist mir sô leit,  
daz mich die sô selten      ruochent hie gesehen.  
ich hoere mîn die liute      niwan für ellende jehen.》 (1403)

そこで王妃はいった、「あなたもよくご承知のことですが、

私には身分のよい親族がおるのでございます。

それがめったに私を訪ねてくれないのを悲しく存じます。

世間の人々が私を風来坊のように取沙汰していると聞きますので。」

「風来坊」(ellende, 1403, 4) どころか、クリエムヒルトはフン族の国にて大いなる榮譽を担っていた——この限りでは、侮辱を受けたプリュンヒルトとは正反対である——という事実を考え合わせると、彼女の言葉の中にも、プリュンヒルトの場合と同様、虚偽が混ざっていることが容易に理解できよう。クリエムヒルトが悪い企みを抱いている (1399) とはつゆほども知らない——この点でグンテル王とは異なる——エツェル王は、ただちに妻の願いを受け入れて、客人たちを饗宴に招待すべく、ブルゴントの国へ使者(スウェンメリーンとウェルベル)を遣わすこととなる (1408) のである。使者たちは、前編のプリュンヒルトの場合と同様、クリエムヒルトの悪意に満ちた伝言をもって出かけてゆくのであり、この点でも前編と後編とは対を成していると言えよう。

このように両王妃の leit はいずれも秘められており、これまで勇士たちから欺かれてきた(クリエムヒルトについては後述) 両王妃は、今や逆に欺く側にあるのである。そのように秘められた王妃の leit に全く気づいていないという点でも、ジーフリトとリュエデゲールは前編と後編で対応関係にあると言えよう。

まずジーフリトがプリュンヒルトの真意に気づいていないということは、彼が快く招待に応じた (vgl. 758-9) ことから明らかである。ジーフリトは何の災いを予感することもなく、王妃とともに沢山の素晴らしい衣裳を馬に積んで (778) 歓楽の期待される土地に向かって馬を進める

(779, 3) ののである。ウォルムスに到着した際にも、ジーフリトは、王妃とともに華やかに (mit vil grôzen êren, 791, 1) 出迎えられ、丁重なる歓待 (787, 2-3; 791, 4) を受けたのであるが、しかし、華やかな饗宴の日々が続くうち、プリュンヒルトの leit が徐々にあらわとなってくるのである。

このように前編では招待の旅が容易に決定され、旅そのものも平穩のうちに行なわれるのであるが、後編の場合にはそれとは逆に重臣ハゲネの猛反対で激しい議論が飛び交い、結局ハゲネが王弟ゲールノート (1462) とギーゼルヘル (1463) に侮辱されたことから決定されたブルゴント族の旅立ちは、重々しい武装を整えて (1471) の出発であり、旅の途上でもさまざまな苦難が待ち受けているのである<sup>6)</sup>。このような並々ならぬ旅立ちであるにもかかわらず、その旅の途上で一族を歓待するベッヒェラーレンの辺境伯リュエデゲールは、ジーフリトと同様、何の災いも予感していない。それどころかリュエデゲールは、宿舎の依頼を受けたとき、口元に微笑を浮かべてこう答えるほどである。

《nu wol mich dirre mære,      daz die künige hêr  
geruochent mîner dienste,      der wirt in niht verseit.  
koment si mir ze hûse,      des bin ich vrô unt gemeit.》 (1646, 2-4)

「これは嬉しいお知らせです、貴い王たちが私をお役に立てて下さるとは。辞退などはいたしません。皆様が私の館やかたにご入来じゆらいとなったら、欣喜雀躍きんきじやくやくいたします。」

リュエデゲールは、ディエトリーヒ (vgl. 1718; 1723; 1724) とは異なって、一族の旅を全く遺憾なことと思うこともなく、一行を心から歓迎する。勇士らが、これにまさるもてなしをうけた例はないであろう (1668; 1671) ことは随所に語られている。丁重に歓迎したのみか、息女をギーゼルヘルと婚約までさせてしまう。引出物をたっぷり贈ったのみか、さらには旅路の案内をしてフン族の国まで出かけてしまうのである。フン族の国に到着したときも、ハゲネとクリエムヒルトとが最初から激しく対立している (1737-1746) ことにも勿論気づくことなく、リュエデゲールはエッツェル王にこう言うのである。

《ir muget si sehen gerne;      ir triuwe diu ist guot,

6) このため前編の旅はほんの十数詩節 (778-788) で済まされているのに対して、後編の旅は実に二百詩節以上 (1506-1717) も費やされて、こと細かに語られている。この点でも前編と後編とは著しい対照を成していると言えよう。ともかく、詩人の関心は、前編においてはすでにウォルムスでの両王妃の口論に向けられているのに対して、後編では出発前から嵐が吹き荒れているブルゴント族の旅の様子、すなわち、ブルゴント族がいかにして運命に向かって突き進んで行ったか、その過程に向けられているのである。前編でジーフリトが旅立つ国は今やニーベルンゲン国 (778, 3) と呼ばれており、同様に後編でも鎖鎧を身につけて出かけるブルゴント族はニーベルンゲン族 (1523, 1; 1526; 1527) と呼ばれている。前編と後編におけるこれらの旅は、全く対照的であるとはいえ、いずれもニーベルンゲン族の旅であり、破滅への旅であると言えよう。

der mîner vrouwen mâge sô schône kunnen pflegen.  
si bringent iu ze hûse vil manegen wætlîchen degen.》(1815, 2-4)

「王様には、お客人を<sup>よろこ</sup>んでお迎えになられます。  
お妃様のお身内の方々は、厚い真心をいだいておられ、  
この<sup>やかた</sup>館へも<sup>いでたち</sup>扮装麗しい武士をあまたお召連れになりました。」

武士をあまた連れてきたのも一族の厚い真心だと理解している。クリエムヒルトの真意に気づいたとき、リュエデゲールはすでに苦境に陥っていたのであるが、しかし、それをリュエデゲールの落度だと咎めることができようか。プリュンヒルトの leit に気づいていないジーフリトにも同じことが言えよう。いずれの場合にも悲劇はいかんともしがたい運命の力によって展開されてゆくのであり、その中で彼らはただ彼らの誠実を尽くすのみである。彼らの行為が誠実であればあるほど、のちに起こる彼らの悲劇はそれだけ一層深まってゆく結果となるのである。

##### 5. ジーフリトの暗殺——triuwe の勇士——

ジーフリトの悲劇は結局のところ、イースラントでプリュンヒルトに向かって言ったあの契約上の言葉(420-2)に起因している。高貴なる二人の王妃が饗宴の席でそれぞれの夫の自慢話を始めた(819-821)とき、クリエムヒルトは自分の夫がいろいろな点で大きな誉れを得ている(819, 3)ことを持ち出せば、プリュンヒルトは、初めて彼らに直面した折にジーフリトが自分で、自分はグンテル王の家来であると言った(820-821)ことを取り上げて反論するからである。両王妃の口論はこの「臣下」(eigen, 821, 3)の問題をめぐって展開し、<sup>しんい</sup>膿<sup>ほひら</sup>毒の炎(826)は広大な聖堂の前で燃え上がる。結局、プリュンヒルトは、「力」による征服を意味している指輪と帯とを見せつけられて、ついに泣き出してしまう。これほどひどい恥辱はほかにはないのである。彼女が泣いているのを見て、わけを尋ねたハゲネは、子細をきくと、即座に、それはクリエムヒルトの夫が償わなければならないと誓って(864)、ジーフリトの命をとろうと謀る(865)。グンテル王が諫めても、ハゲネはしきりに暗殺を主張し、始終グンテル王を唆かして(870)、ついには秘策を打ち明けて主君をも説き伏せるのである。

ジーフリトは、しかし、その秘策に気づいていない。不実なブルゴント一族に対してジーフリトは逆に誠実な客人として描かれていると言えよう。グンテル王や家来の人々が沈んでいるところを見出したジーフリトは、以前と同じように、誠実な心から援助を申し出る(883)。すなわち、リウデガストとリウデゲールとが再度戦いを挑んでいるという事情を聞いて、それがハゲネの策略だとも知らずに、戦いに出かけることを約束するのである。しかし、その誠実さが逆手にとられて裏切られることとなるのである。

裏切られるのはジーフリトのみならず、クリエムヒルトもまた然りである。否、プリュンヒルトと同様、まずクリエムヒルトが欺かれる必要があるのである。ハゲネはクリエムヒルトのところへ出かけて、夫の出陣のことを心配する彼女の心を巧みに利用してジーフリトの弱点を聞き出

すために、偽りの援助を約束する。

《Vrouwe》, sprach dô Hagene,      《unt habt ir des wân,  
daz man in müge versniden,      ir sult mich wizzen lân,  
mit wie getânen listen      ich daz sol undertstên.  
ich wil im ze huote      immer rîten unde gên.》 (897)

「お妃様、」ハゲネがいった、「もしもあの方が何者かに  
傷でも負わされることをご心配なさるなら、  
どういう工夫でそれを防いだらよいかお聞かせ下さいまし。  
私は馬上でもまた徒歩の場合でも、いつもご守護いたしましょう。」

かくて彼女はハゲネの誠実を信じて、止せばいいのに、ジーフリトの打明け話、すなわち、ジーフリトがかつて山の麓で竜を退治した折、竜の血を浴びたときのことを話したのである。

《Ich meld iz ûf genâde,      vil lieber vriunt, dir,  
daz du dîne triuwe      behaltest ane mir.  
dâ man dô mac verhouwen      den mînen lieben man,  
daz lâz' ich dich hoeren;      deist ûf genâde getân.》 (901)

Dô von des trachen wunden      vlôz daz heize bluot  
und sich dar inne badete      der küene ritter guot,  
dô viel im zwischen die herte      ein lindenblat vil breit.  
dâ mac man in versniden:      des ist mir sorgen vil bereit.》 (902)

「私は、親愛なハゲネよ、おん身が私に信実を  
つくしてくれることを信じて、どこがいとしい夫の急所であるかを  
打明けておきましょう。こういうお話をするのも、  
ひとえにおん身の信実を信じればこそそのことなのです。

竜の傷口から熱い血潮が流れ出し、  
天晴れな勇士がそれをからだに浴びた際、  
両方の肩の骨の間に一枚の広い菩提樹ぼだいじゆの葉がおちてきました。  
この場所こそあの人の急所なのです。これが私の心配の種なのです。」

さらにその上、止せばいいのに、戦場でジーフリトのどこを護ればよいかが目で見えるように、  
衣裳の上に小さな印を縫いつけておくようにというハゲネの要求にも応じてしまうのである。ク  
リエムヒルトはこれが夫の身に役立つことと思ったのだが、あに計らんやクリエムヒルトの夫は、  
これに乗せられたのである (905, 2-3)。

ジーフリトの弱点を聞き出したハゲネは、これで戦争に出かけてゆく必要もなくなったので、  
策略通り、再度贖の使者を遣わせて戦闘中止の知らせを告げさせた上、次の策略として、ジーフ  
リトの意気盛んな心 (909, 1-2) をうまくとらえて、戦闘の代わりに森へ狩りをしに出かけるこ

とを提案する。不実きわまるこのハゲネの企らみ (911, 4) には勿論ジーフリトは気づく由もない。ただクリエムヒルトは、自分がハゲネに打ち明けた話を思い出し、狩りを止めるよう忠告する。すなわち、二ひきの猪が野原でジーフリトを追いかけて、草花が朱に染まったという不吉な夢を持ち出して説得する (921-2) ののであるが、ジーフリトは依然として一族を信頼しきったままである。

Er sprach: *«mín triutinne, ich kum in kurzen tagen.  
ine weiz hie niht der liute, die mir iht hazzes tragen.  
alle dine mâge sint mir gemeine holt,  
ouch hân ich an den degenen hie niht anders versolt.»* (923)

彼がいった、「かわいい妃よ、わしは日ならずして帰ってくる。  
当地でわしに対して敵意を抱くような人たちがいるとは思わぬ。  
そなたの親戚はみなわしに好意をもっている。  
わしとして勇士たちから悪い報いをうけるはずはない。」

再度クリエムヒルトが、二つの山が夫の上に崩れかかるいやな夢を見たことを持ち出して説得する (924) が、ジーフリトは信じきったまま、狩りへと出かけてゆく。このように不吉な夢に基づく妻の忠告にもかかわらず一族を信じきって狩りに出かけてゆくジーフリトは、中世騎士であると同時に、運命の力に導かれて破滅へと向かって進んでゆく古代ゲルマンの英雄でもあると言えよう。確かにジーフリトは悲劇的結末の運命を悟ってはいないのであるが、古代ゲルマン的英雄精神がジーフリトをしてその運命に向かって突き進ませるのである。否、運命を自分自身は悟っていないところにジーフリトの悲劇の特質があると言えよう。言い換えれば、ジーフリトの悲劇性はその中世的な *triuwe* の中にこそあるのである<sup>7)</sup>。狩りが終わって、泉まで競走して一番にジーフリトが着いた場面でもジーフリトの *tugent* (作法正しさ) は、明確に語られている。

Die Sifrides tugende wâren harte grôz.  
den schilt er leite nider, aldâ der brunne vlôz.  
swie harte sô in durste, der helt doch niene tranc,  
ê dâz der kunic getrunke; des sagt er im vil boesen danc. (978)

ジーフリトはきわめて作法正しい勇士であった。  
彼は泉の流れるほとりに楯をおき、のどの渴きははげしかったけれど、  
国王の飲むまでは決して水を飲もうとはしなかった。  
しかるに国王は彼にひどい報い方をしたのである。

ジーフリトのこの作法正しさ (*zühte*, 980, 1) が悪用されたのである。すなわち、グンテル王の

7) ジーフリト悲劇の特質については拙稿：「ニーベルンゲンの歌」と「平家物語」における悲劇の英雄像 (徳島大学教養部紀要——人文・社会科学——第22巻1987年) を参照のこと。なお、本稿は上記の拙稿と重複するところもあることを付記しておきたい。

飲んだあとで泉の水を飲もうとしたところ<sup>8)</sup>を、ハゲネが衣裳の上の印をめがけて槍で突き刺すのである。しかもその槍は、ジーフリトが泉までの競走に際して自ら身につけてきた (vgl. 975; 980) ものなのである。ジーフリトの triuwe もクリエムヒルトの triuwe も、こうして逆手に取られてしまったのである。triuwe が悪用されたということは、瀕死の手傷を負ったジーフリト自身の口からも明確に聞かれる。

《Dô sprach der verchwunde:      《jâ ir vil boesen zagen,  
was helfent mîniu dienste      daz ir mich habet erslagen?  
ich was iu ie getriuwe;      des ich engolten hân.  
ir habt an iuvern mâgen      leider übele getân. (989)

Die sint dâ von bescholten,      swaz ir wirt geborn  
her nâch disen zîten.      ir habet iuvern zorn  
gerochen al ze sêre      an dem lîbe mîn.  
mit laster ir gescheiden      sult von guoten recken sîn.》 (990)

ひんし  
瀕死の手傷を負った勇士はいった、「心のまがった<sup>ひきょうもの</sup>卑怯者、  
こんなにして殺されるようでは、わしの日頃の心尽くしは  
なんの役に立ったか。わしの誠実がこんな報いをうけるとは。  
おん身らは遺憾にも一族の名折れとなる所業をしでかした。

これからのち生まれてくるおん身らの<sup>けんぞく</sup>眷族は、  
このために汚名をうけるであろう。おん身らはわしに対し、  
その恨みをあまりにむごく報いた。この罪業によっておん身らは、  
立派な武士たちから見放されるようになるう。」

信実のころ (triuwe, 991, 3) を有するものは、彼を悼み嘆いたが、実にこの天晴れな勇士は、それに値したのである (991, 3-4) と詩人も明らかにしているように、ジーフリトの悲劇の特質はその triuwe にあると言ってもよいであろう。本来古代ゲルマン的な英雄であるジーフリトは、こうして中世騎士の徳目の一つである誠実 (triuwe) を持ち合わせたきわめて理想的な騎士として滅びてゆくのであり、彼が誠実であればあるほど、それだけ一層彼の死は多くの者から、誰よりもまずクリエムヒルトから悼く嘆かれ、それがさらにのちの後編の悲劇へとつながってゆくのである。

## 6. リュエデゲールの最期——tugentの父——

このように前編においてプリュンヒルトの leit の復讐の犠牲となったのがジーフリトであれば、後編で展開されるクリエムヒルトの leit の復讐において最大の犠牲者となったのは言うまでもな

8) 王妃たちは優位をめぐる醜い争いをしたのに対して、ジーフリトとグンテル王は反対に作法正しい振る舞いをしている点、対照的で興味深い。

くリュエデゲールである。王妃の leit には気づかずに誠実さからその招待の旅に応じたジーフリトと同様、リュエデゲールも王妃の leit に気づくことはなく、真心からブルゴント族を自らの領地で歓待したのみか、息女をギーゼルヘルと婚約させた上、さらに一族をフン族の国へと案内したのであったが、その誠実さから出た行為が彼の場合もまた逆に悲劇へと転化してゆくのである。しかし、ジーフリトの triuwe が秘策によって欺かれたのとは異なって、リュエデゲールの triuwe はあからさまな葛藤の中に立たされるのである。両民族の戦いとなってそれを衷心から打嘆くリュエデゲールの悲劇的状況は、罵言を吐きかけられたために殴り殺したフン族の武士に向かって言う言葉においてよく表わされていると言えよう。

《Hin, du zage mære), sprach dô Rüedegêr.  
 《ich hân doch genuoge leit unde sêr.  
 daz ich hie niht envihte, zwiu wîzest du mir daz?  
 jâ wære ich den gesten von grôzen schulden gehaz, (2143)

Unde allez daz ich möhte, daz het ich in getân,  
 niwan daz ich die recken her gefüeret hân.  
 ja was ich ir geleite in mînes herren lant;  
 des ensol mit in niht strîten mîn vil ellendes hant.》 (2144)

「失せろ、心の曲った卑怯者、」リュエデゲールがいった、  
 「わしはあり余るほどの悩みと苦しみをもっているのだ。  
 それをこの場で戦わぬなどと、なんで貴様は答<sup>とが</sup>めるのだ。  
 わしとてあの客人たちには当然敵意を抱いている。

もしわしがあの勇士たちを案内した身でなかったら、  
 あの人たちに思うがままの仕打ちをも加えたであろう。  
 だが主君の国への案内役を勤めたればこそ、  
 残念ながらブルゴント勢と戦うわけにはゆかぬのだ。」

誠実であるがゆえに、リュエデゲールはブルゴント族を相手にして戦うわけにはゆかないのであるが、王妃クリエムヒルトがそこへやってきて、かつての誓いを思い出させる (2149) と、リュエデゲールは êre と sêle とを区別してこう言う。

《Daz ist âne lougen: ich swuor iu, edel wîp,  
 daz ich durch iuch wâgte êre unde ouch den lîp.  
 daz ich die sêle vliese, des enhân ich niht gesworn.  
 zuo dirre hohgezîte brâht' ich die fürsten wol geborn.》 (2150)

「あなた様に名誉や生命をも捧げるとお誓い申し上げたことは  
 否みはいたしませぬ、気高いお妃様。しかし魂までも犠牲にするとは  
 誓いませんでした。私はあの生まれ貴い王様がたを  
 自分でこの饗宴<sup>きやうえん</sup>にお連れ申したのでございます。」

このように悩むリュエデゲールに対して、クリエムヒルトとエッツェル王が二人して彼の足もとにひざまづいて嘆願するに及んでは、リュエデゲールの嘆きは頂点に達するのである。

《Owê mir gotes armen, daz ich dize gelebet hân.  
 aller mîner êren der muoz ich abe stân,  
 triuwen unde zûhte, der got an mir gebôt.  
 owê got von himele, daz michs niht wendet der tôt! (2153)

Swelhez ich nu lâze unt daz ander begân,  
 sô hân ich boesliche unde vil übele getân:  
 lâze aber ich si beide, mich schiltet elliu diet.  
 nu ruoche mich bewîsen, der mir ze lebene geriet.》 (2154)

「ああ、このような目にあうとは、なんと<sup>みじ</sup>惨めな身であろう。  
 あらゆる名誉をなげうち、神に授けられた信義も礼節も  
 捨ててしまわねばならぬとは。天つ神も哀れとおぼせ。  
 死んでしまったらこうした目にも会うまいに。

どちらを捨てて、他の一つを行なっても、私は悪いやつ、  
 怪しからぬ男といわれましょう。さりとて両方とも捨ててしまえば、  
 世の人みんなが私を罵るでしょう。  
 私に生命をあたえ給うたものよ、どうぞ教えを垂れて下さいまし。」

リュエデゲールの悲劇も、結局のところジーフリトと同じように、国王の求婚の際に誓ったあの誓言 (1256) に基づいていると言えよう。リュエデゲールはわが身に痛手と苦惱 (2156) とを招くことを知っていたので、できることならまず最初にエッツェル王とクリエムヒルトの願いを拒みたく思い、領土も城も返して、「もって生まれた足で、異国へさすらいの旅に出かける」 (2157, 4) ことを申し出る。しかし、それはリュエデゲールにとって可能ではない。エッツェル王は彼の主君であり、封建臣下として彼にいつまでも仕える義務があるばかりか、さらにクリエムヒルトに対しては求婚の旅で誓ったあの誓言 (1256) があるからである。フン族の国王と王妃は彼を決して自由にさせはしない。それどころか、ますます援助を願い出るのであり、リュエデゲールのこの上もない苦惱 (2159-61) に対してクリエムヒルトが無慈悲な要求を続けたとき、リュエデゲールの決意も定まった。勿論破滅への覚悟である。彼は身も魂も賭けることとなった (2166, 1) のであり、自らの家来に向かってこう呼びかける。

er sprach: «ir sult iuch wâfen, alle mîne man.  
 die küenen Burgonden die muoz ich leider bestân.》 (2167, 3-4)

彼はいった、「わが勇士の面々、みんな武装をととのえるのだ。  
 わしは本不意ながら、ブルゴントの勇士たちと戦わねばならぬ。」



しかし、この瞬間リュエデゲールの内から「英雄的なもの」が生じたのであって、自ら破滅に突き進んで行って、如何にして英雄としての名誉を汚すことなく滅んでみせるかということが、今やリュエデゲールの課題なのである<sup>9)</sup>。英雄的なものは「ある」(sein)のではなく、「成る」(werden)なのであって、今や破滅に向かって突き進んでゆくリュエデゲールは宮廷的騎士ではなく、古代ゲルマン的英雄である。以前の宮廷的騎士リュエデゲールが悩み嘆いていたのであり、今や武装して戦いに突入してゆくのは古代ゲルマン的英雄リュエデゲールなのである。兜をかぶって(2170)、自分の縁者であるブルゴント族のいるところにくると、リュエデゲールは、交誼を絶つ旨を宣告し(2175)、ついには客人たちと戦うこととなるのである。辺境伯の家来たちはいとも勇ましく、リュエデゲールについてもこう語られている。

Der vogt von Bechelâren      gie wider unde dan,  
alsô der mit ellen      in sturme werben kan.  
dem tet des tages Rüedegêr      harte wol gelîch,  
daz er ein recke wære,      vil küene unt ouch vil lobelîch. (2213)

ベッヒェラーレンの領主は、  
勇力をもって戦場で功名をたてる者にふさわしく、  
あなたこなたと駆けめぐった。実にこの日のリュエデゲールは、  
勇敢にして誉れたかい武将たるに恥じない働きぶりを示したのだ。

リュエデゲールは今や、勇力をもって(mit ellen)戦場を駆けめぐる武将(recke)なのである。彼は甲冑姿も凛々しく、腕並すぐれた勇者の面目を発揮した(2215)のである。彼が手にした勇士の数はおびただしく(vgl. 2215, 2)、それがためブルゴント族の剛勇なゲールノートも、もはや黙って見てはおられぬ状態となり、かつてリュエデゲールから贈られた剣を持って、リュエデゲールと対峙する。英雄的な誉れ(êre, 2218, 3)を立てようとする二人は互いに躍りかかり、鋭利な剣の一撃を互いに相手に加える。壮絶な一騎討ちで両者は相果てることとなるのである。ジーフリトも自らの投槍で突き刺されたのであれば、リュエデゲールもかつて自らが贈った剣で刺されたのであり、その点共通しているが、しかし、死を予感することもなく騙し討ちにあったジーフリトの最期とは対照的に、リュエデゲールは死を覚悟した勇敢なる戦いで命を落すこととなるのである。ジーフリトの死が「他者による暗殺」であったとすれば、リュエデゲールの死は「自己破滅」であると言えよう。ともかく、ジーフリト悲劇の特質は「古代ゲルマン的勇士の騎士化」にあるのであり、それに対してリュエデゲール悲劇の特質は「宮廷的騎士の英雄化」にあるのである。ここでニーベルンゲンの詩人は宮廷的なものからいかにして英雄的なものが生じるかを描き出しているのであり、これがすなわち後編の内容とするところであると言ってもよいで

9) リュエデゲール悲劇の詳細については拙稿：「ニーベルンゲンの歌」におけるリュエデゲール悲劇の特質(「かいろす」第19号1981年)を参照のこと。なお、リュエデゲールの悲劇性についても、本稿は上記の拙稿と重複することがあることを付記しておく。

あろう。

しかし、そのリュエデゲールの死は単なる勇敢な英雄の死ではない。彼は客人たちのところに出かけて対峙した際、彼は本来の宮廷的騎士としての特質にふさわしくなおも贈物をするのである。戦っているうちにフン族から楯を切り裂かれてしまったハゲネは、すなわち、リュエデゲールに対して „du“ で話しかけるのである。

《Daz des got von himele geruochen wolde,  
daz ich schilt sô guoten noch tragen solde,  
sô den du hâst vor hende, vil edel Rüedegêr!  
so bedorft ich in den stürmen deheiner halsperge mêr.》 (2195)

「いとも気高いリュエデゲール殿、天つ神のみ恵みにより、  
今おん身が手にしておられるような立派な楯をわしも持てるようになったら、  
どんなに嬉しかろう。そうすればわしは戦場で、  
もはやいかなる鎧もつける必要はないのだが。」

この要求は単に物質的な武装のことを意味しているのではない。ハゲネが身を守ることのできる楯なら、回りに倒れた騎士たちの楯が沢山ある筈だからである。この象徴的な楯の願い出に対してリュエデゲールもハゲネに „du“ で答える。

《Vil gerne ich dir wære guot mit mînem schilde,  
torst' ich dir in bieten vor Kriemhilde.  
doch nim du in hin, Hagene, unt trag' in an der hant.  
hey soldest du in füeren heim in der Burgonden lant!》 (2196)

「クリエムヒルト様<sup>はばか</sup> 憚ることなく差しあげてよろしければ、  
わしは<sup>よろこ</sup>欣んでおん身にこの楯をご用意していたすであろうが。  
いや、ハゲネ殿、これはおん身に差しあげる、持ってゆかれよ。  
願わくはブルゴントの国へこれを持ち帰られるように。」

リュエデゲールがこのようによろこんでその楯を贈ろうと申しいでたとき、あまたの武士の眼は熱い涙にうるんで見えた (2197, 1-2)。傲岸冷酷な心ざまの男であったハゲネも、リュエデゲールが今や最期の時にのぞんで申しいでた贈物に接しては、さすがに深く心を動かされた (2198, 1-3) ほどであり、それゆえハゲネは、楯を受け取ると、自分は彼には攻撃をしかけないことを誓うのである。このハゲネの態度はリュエデゲールにその名誉を回復させている<sup>10)</sup>と言えよう。最後の生の瞬間においても自らの「貴い心ばえ」(tugent, 2199, 4) を証明して見せたリュエデゲールの死は、詩人も賛嘆しているように、まさに「あらゆる美德の父」(vater aller tugende,

10) Vgl. Friedrich MAURER: Die Einheit des Nibelungenlieds nach Idee und Form. *Der Deutschunterricht* 5, 1953. S. 35.

2202, 4) の死であったのである。自らの楯を贈与するという気高い心及びそのために剣を放棄するという高貴な心は、ハンス・ナウマンの言葉を借りて言えば、13世紀初頭の騎士的・キリスト教的基盤においてようやく成長した花なのであり、この楯の贈与の瞬間は全く宮廷的な瞬間である<sup>11)</sup>と言えよう。壮絶な戦いがますます激しくなっていく中であって、リュエデゲールの行為は、全く明るい光を投げかけており、ここにリュエデゲールのこの作品における役割があると言えよう。

このように理想像として描かれているだけに多くの者から嘆かれ、その死はさらに悲劇を大きくする結果となっている。これまで中立的な態度をとっていたディエトリーヒの参戦もこのリュエデゲールの死がきっかけ (vgl. 2329-32) である。このディエトリーヒの干渉によって戦いも悲劇の頂点に達するのであり、その死によってさらに悲劇が大きくなっていく点でも、リュエデゲールはジーフリトと同じ役割を果たしていると言えよう。ニーベルンゲン悲劇はこうしてジーフリトの暗殺とリュエデゲールの死という二重の悲劇によって展開されていくのであり、両者は全体のテーマにとっても無くてはならない人物であることが容易に理解できるのである。

## 結 び

以上、結婚と招待という二つの出来事を軸として物語構造を細かに分析してきたが、全体を一つにまとめてみるならば、巻末の図式Ⅱのように図式化することができよう。この図式Ⅱからも明らかに確認できることは、「ニーベルンゲンの歌」は前編と後編とが詳細に至るまで均整のとれた結婚と招待の二重構造を成しており、その中で重要な役割を演じているのが、前編ではジーフリトであり、後編ではリュエデゲールであるということである。しかも両者は、これまで見てきたように、ともに対照的であり、彼らの活躍とその悲劇はそれぞれ前編と後編の特質を決定づけていると言ってもよいであろう。

前編のあらすじを決定づけているジーフリトは、すなわち、本質的には古代ゲルマンの英雄であり、決定的なところでは彼の超人的な力が威力を発揮する。ジーフリトはこの作品において古代ゲルマン的雰囲気を作り出していると言える。グンテル王の求婚の旅においても、ジーフリトはプリュンヒルトのことやイスラントへの航路を心得ている古代ゲルマンの英雄なのである。しかし、ジーフリトはその際グンテル王との契約によって国王に「仕える」中世騎士になったとも言わなければならない。以後、ジーフリトは二重の像でグンテル王に仕えるのであるが、この古代ゲルマン的な要素と中世騎士的な要素との融合は、上で考察してきたように、作品の至るところに見い出される。招待の旅でウォルムスへ出かけ、狩りを行なうことになったときも、この二つの要素の融合は認められる。すなわち、妻の不吉な夢の忠告にもかかわらず、狩りに出かけてゆくジーフリトは、運命に向かって突き進む古代ゲルマンの勇士であると同時に、一族を信頼しきった誠実な中世騎士でもあるのである。まさにこの「古代ゲルマン的勇士の騎士化」という

11) Hans NAUMANN: Ruedegers Tod. *DtVjs.* 10, 1932. S. 399. u. S. 402.

点にジーフリト悲劇の特質があると言えよう。従って、古代ゲルマン的なものと中世騎士的なものとの融合は、決して「裂け目」でも「矛盾」<sup>12)</sup>でもなく、むしろこの作品におけるジーフリト像の特質なのであり、また秘策に満ちた前編の内容の特質でもあるのである。

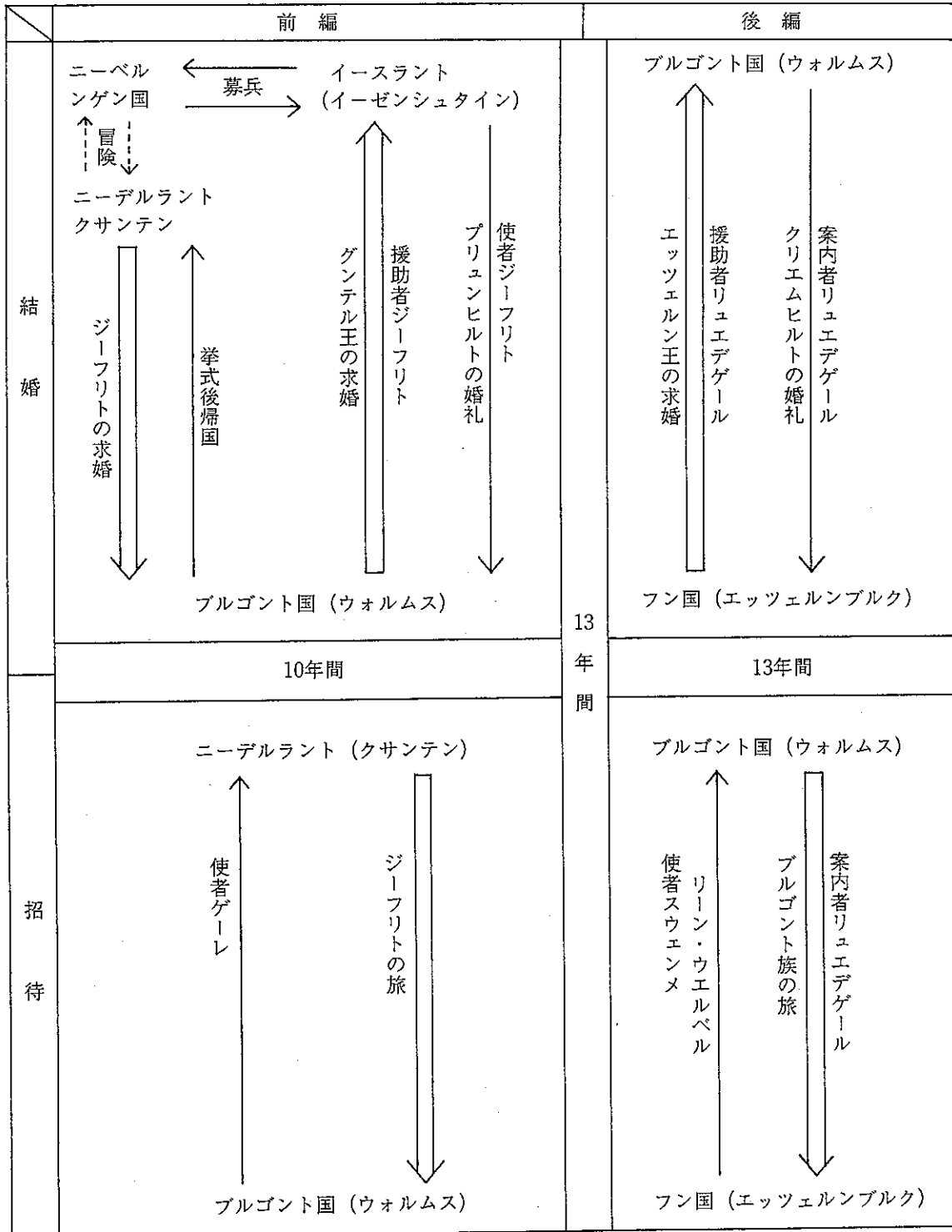
この前編のジーフリトの二重の像に対して、後編のリュエデゲールは徹頭徹尾宮廷的である。結婚の旅の際のエッツェル王との主従関係においても誠実であり、悲しみに暮れるクリエムヒルトが使者としての彼に直面する気になったのも、彼の誠実ゆえであれば、またエッツェル王と結婚する気になったのも彼の誠実な誓約のためである。その彼の誠実さとは逆行するようにクリエムヒルトの結婚の決意によって後編のあらすじはだんだんと雲行きがあやしくなってゆくだけに、リュエデゲールのこのようなとりわけ誠実な態度は、宮廷的な明るい雰囲気を作り出しているのであり、その点でもこの作品において重要な役割を果たしていると言えるのである。激しい議論の末に決定された招待の旅においても、彼の誠実さはもてなしとなって展開されるが、この誠実さがまた彼の悲劇の原因ともなる。しかし、リュエデゲールはのがれられないその苦境の中からいかにして勇猛果敢な英雄として滅んでみせるか、言い換えれば、死によっていかに生きるかを感動的に示しているのである。最後の瞬間になって初めて示したこの「宮廷的騎士の英雄化」にリュエデゲール悲劇の特質があると言えるのであるが、これはまたブルゴント族滅亡、すなわち、騎士的なものから英雄的なものがいかに生じ、そしていかに滅びるかを高らかに歌い上げている後編の内容の特質でもあるのである。

このように両編の赴きは「古代ゲルマン的英雄の騎士化」と「宮廷的騎士の英雄化」という点でも全く対照的であると言えるが、しかし、いずれにおいてもそれぞれの方法で古代ゲルマン的な要素と中世騎士的な要素とが見事な融合を示しながら、前編ではプレンヒルトの leit の復讐が、そして後編ではクリエムヒルトの leit の復讐が、同じ結婚と招待という構造の中で繰り返して語られてゆくのであり、全編のテーマであるニーベルンゲン族全滅の悲劇、すなわち、ニーベルンゲン財宝を所有している一族全滅の悲劇も、その対照的な二重構造によってさらに一段と高められ強められてゆく結果ともなっているのである。 (1987・9・10)

※本稿執筆にあたりテキストは Helmut de Boor (Hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage F. A. Brockhaus Wiesbaden 1972《を用い、テキストから邦語で引用・説明している部分については、相良守峯氏の訳(岩波文庫)を使用させていただいたことを最後に付記しておきたい。

12) Vgl. Helmut de Boor: a. a. O., Erläuterung S. 16.

図式I 「ニーベルンゲンの歌」における旅と空間



(※ ⇔ は求婚及び招待の旅、→ はそれ以外の旅。なお、点線はハゲネの語りの中の旅。)

図式Ⅱ 「ニーベルンゲンの歌」における結婚と招待の二重構造

	前 編	後 編
結 婚	<p>グンテル王の求婚 (自発的)</p> <p>↓ 依頼 (契約)</p> <p>援助者ジーフリト (古代ゲルマン的)</p> <p>↓ 求婚の旅</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>4名で出発=Reckenfahrt</li> <li>三種競技=冒険的交渉</li> </ul> <p>イースラント (プリュンヒルト)</p> <p>↓ 婚礼の旅</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>花嫁=権力の減退</li> <li>援助者の役割=募兵と使者</li> </ul> <p>ブルゴント国 (二組の結婚式)</p> <p>↓</p> <p>プリュンヒルトの涙 (leit)</p>	<p>エッツェル王の求婚 (他動的)</p> <p>↓ 依頼 (誠実)</p> <p>援助者リュエデゲール (宮廷的)</p> <p>↓ 求婚の旅</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>500名で出発=hovereise</li> <li>誓約=宮廷的交渉</li> </ul> <p>ブルゴント国 (クリエムヒルト)</p> <p>↓ 婚礼の旅</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>花嫁=権力の増大</li> <li>援助者の役割=案内と歓待</li> </ul> <p>フン国 (結婚式)</p> <p>↓</p> <p>クリエムヒルトの涙 (leit)</p>
招 待	<p>プリュンヒルト (leitの回復)</p> <p>↓ 依頼 (嘘偽)</p> <p>援助者グンテル王 (不承不承)</p> <p>↓ 使者の旅</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>使者=ゲーレ</li> <li>王妃の伝言=悪意</li> </ul> <p>ジーフリト夫妻 (快く受諾)</p> <p>↓ 招待の旅</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>一行=華やかな衣裳</li> <li>ジーフリト=歓楽の期待</li> </ul> <p>ウォルムス (丁重な歓迎)</p> <p>↓</p> <p>両王妃対立</p> <p>↓</p> <p>ジーフリト暗殺 (他者による暗殺)</p> <p>↓</p> <p>人々の悲嘆</p>	<p>クリエムヒルト (leitの回復)</p> <p>↓ 依頼 (嘘偽)</p> <p>援助者エッツェル王 (快く承諾)</p> <p>↓ 使者の旅</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>使者=スウェンメリーン・ウェルベル</li> <li>王妃の伝言=悪意</li> </ul> <p>ブルゴント族 (ハゲネ反対)</p> <p>↓ 招待の旅</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>一行=重々しい武装</li> <li>リュエデゲール=歓待と案内</li> </ul> <p>エッツェルンブルク (激しい対立)</p> <p>↓</p> <p>両民族対立</p> <p>↓</p> <p>リュエデゲール最期 (自己破滅)</p> <p>↓</p> <p>人々の悲嘆 → ブルゴント族滅亡</p>

(※ ⇔ は旅を表わし、→ はあらすじの展開を表わす。)